

「ウイグルの宗教共生の精神と文化」 信教の自由と人権シンポジウム開催



《プログラム》

主催者挨拶

伊東正一 ICRF 委員長
(九州大学名誉教授)

講演①

田中哲二氏
(中央アジア・コーカサス研究所所長)

講演②

イリハム・マハムティ氏
(ウイグル文化センター理事長)

宗教新聞記事解説

杉原誠四郎氏
(元武蔵野女子大学教授)

パネル・ディスカッション&質疑応答

閉会のことば

東和空 ICRF 副委員長
(聴行庵住職)



ウイグルの宗教共生の精神と文化



ウイグル文化センター理事長

イリハム・マハムティ氏

プロフィール

1969年生まれ。1998年、新疆大学卒業。2001年来日。2011年に桐蔭横浜大学法学部国際政治学科で修士を取得。アジア民主同盟協議会を創立し会長就任。世界ウイグル会議東アジア太平洋地域全権代表、ウイグル難民支援基金代表理事などを歴任。日本ウイグル協会前代表。現在ウイグル文化センター理事長。

世界ではさまざまな宗教や文化の摩擦が報じられる中、私たちは「共生」という言葉の本当の意味を問い直す必要があると感じている。ここでは、ウイグルという地域が長い歴史の中で育んできた多様な宗教文化と、その中で形成された「共生の精神」について、歴史的・文化的な観点からご紹介する。

■ウイグルとは何か？

ウイグルは現在、中国新疆ウイグル自治区にあたる地域で、中央アジアと東アジアを結ぶシルクロードの要所に位置している。東は中国本土、西は中東・ヨーロッパへとつながるこの場所は、古くから交易と文化の交差点だった。

この地に暮らしてきたウイグル人は、テュルク系の民族でありながら、歴史的に仏教、マニ教、ゾロアスター教、キリスト教、そしてイスラム教と、さまざまな宗教と接し、時代ごとに受容してきた。ウイグルとは、多宗教・多文化の縮図のような存在だ。

■ウイグルの宗教文化の多様性

8世紀頃、ウイグル王朝の一部はマニ教を国教とし、また仏教も盛んに信仰された。トルファンやクチャには、仏教石窟や寺院が数多く建てられた。壁画や写経に見る仏教世界の表現は、インド、中国、ペルシャの様式が融合している。

さらに、東方キリスト教（ネストリウス派）やゾロアスター教の影響も強く見られ、宗教的な寛容さと柔軟さがうかがえる。例えば、敦煌文書には仏教・道教・キリスト教・マニ教が同じ倉庫に保管されていたことが記録されている。

10 世紀以降、イスラム教が本格的に浸透し、今日のウイグル人の大多数はイスラム教徒となっているが、他宗教の記憶や文化的痕跡は今もなお残されている。

西安からローマまで続くシルクロードのど真ん中に位置する町がカシュガル。この町が交易の中心となり、宗教、文化の交差点ともなった。宗教的対立がなかったが故にシルクロードが栄えたといえる。互いに助け合いながら、商人たちは長い道のり、砂漠を越えて次の町まで安全に商品を運ぶことができたのだ。

■宗教共生の精神とは何か

ウイグルの「共生の精神」とは歴史的にみて単なる「共にいる」状態ではなく、「違いを受け入れ、学び合い、新たな文化を創造していく力」と言えるだろう。

たとえば、仏教文書をウイグル語に翻訳する過程では、中国語やサンスクリット語、ソグド語の学者が協力し、宗教を超えた知的交流がなされていた。また、マニ教の経典が仏教の形式で描かれたり、イスラム教のモスク建築に仏教建築の意匠が取り入れられたりと、宗教文化の融合は建築や芸術にも表れている。

このような精神は、寛容さ、知的好奇心、他者への敬意といった価値観に裏打ちされたものだ。

■現在と未来への視点

政治的・宗教的な緊張が高まる現在のウイグル地域に国際的な衆目が集まっている。宗教の自由や文化の多様性が脅かされている現状は、私たちに「宗教共生の意味」を問い直させてくれる。過去にウイグルが示してきた宗教間の寛容と共生の精神を再発見することは意味あることだ。歴史を学び、そこから希望を見出すことが未来への第一歩となる。宗教の違いを超えて人々が学び合い、互いの文化を尊重してきた歴史は、私たちがこれからの社会で大切にすべき価値を教えてくれるからだ。今日の話が、皆さんの中にある「共生」へのまなざしを少しでも深めるきっかけとなれば幸いだ。

イリハム・マハムティ氏の
講演はこちらの QR コードから
ご視聴いただけます



6月13日（金）、午後2時より都内会場において、「ウイグルの宗教共生の精神と文化」を主題とするICRF「信教の自由と人権シンポジウム」を開催した。

昨年の同会主催のシンポジウムでは、チベット、モンゴルと共に、ウイグルの人々が宗教の自由と人権が侵害されている現在の悲惨な実態を扱った。今回は、信教の自由を訴えながら、彼らが守りたい文化とは何かに焦点をあてた。

開会に際して伊東正一 ICRF 委員長の主催者挨拶をした。第一部は、最初に前キルギス共和国大統領経済特別顧問で中央アジア・コーカサス研究所所長の田中哲二氏が「中央アジアとシルクロード」を主題に講演。中国の少数民族支配の課題を指摘し、「中国が世界から信頼され尊敬される大国になるためには、世界を納得させる世界の将来像を提示すること。『一帯一路』構想が目指す『人類運命共同体』はいかなるものか具体的な説明がなされることを周辺中小国は期待している。『一帯一路』構想が『現代版シルクロード』を標榜するのであれば、『古代シルクロード』の形成を担ったソグド族、ウイグル族、モンゴル族等の少数民族圏により多くの経済的裨益が及ぶことが期待されている」と述べた。

次にウイグル文化センター理事長のイリハム・マハムティ氏が講演した。2人の講演の後、杉原誠四郎・元武蔵野女子大学教授が、「宗教新聞」4月号に寄稿した「旧統一教会への解散命令をどうみるか」について解説し、宗教法人法の趣旨に鑑み家庭連合の法人解散請求に至るプロセスに誤りがあるとの意見を述べた。

第二部は2人の講師と伊東正一 ICRF 委員長によるパネルディスカッション&質疑応答。参加者からは「ウイグル人が宗教共生の精神を持つことができたのはなぜか」との質問に、イリハム氏は「他人のことを優先し、自分の考えを他人に強要しないという精神で生きてきたからだ」と答えた。

閉会の辞では、ICRF 副委員長の東和空住職が、「日本はどうか、左右を見るだけでなく、自ら知恵を出していかないといけない、そんな学びを頂いた」との所感で結んだ。

ご挨拶

ICRF 委員長
伊東正一



信教の自由のために、ともに立ち上がりましょう！

ICRFはかねてより宗教の自由を標榜するために組織されたものです。私自身、一介のクリスチャンですが、信仰に対する自由というものを、皆様と共に大切にしていきたいと思っております。そのためにも私たちの活動をしっかりとしなければいけないと思う次第でございます。いつ我々の宗教に対する自由が侵されるかわかりません。過去においてもいろいろな宗教が弾圧を受けてきました。私たちはそのようなことを2度と許さないためにも、信教の自由を守る活動を続けていかなければならないと強く思います。そういう意味でわたしも一緒に皆さんと立ちあがろうと思います。共に力を合わせ、お互いの気持ちを尊重しながら、お互いの宗教を自由なものとして守りながら、活動をしていきたいと思っております。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。